

鶴間和幸先生のご退職によせて

武内房司

鶴間和幸先生が二〇二一年三月をもって退職される。先生が学習院大学に着任されたのが一九九六年のことであるから、もう二五年になる。歲月のあまりの速さに驚かされる。先生に最初にお会いしたのはいつ頃だったろうか。正確な時期は記憶していないが、西嶋定生先生の主宰されていたゼミや研究会での颯爽とした先生の姿が思い浮かぶ。当時、先生はまだ髭を蓄えておられなかったと思う。

その後先生は、一九八一年、茨城大学教養部の講師として水戸に赴任され、一九九六年に学習院大学に移られるまで、茨城大学で教鞭をとられた。その間、一九八五年より一年間、中国社会科学院歴史研究所外国人研究員として一〇ヶ月中国で調査研究に従事された。私もまた、一九八三年から八四年一月にかけて北京大学に留学する機会を得たが、当時は、一九七八年に確立した対外開放政策が軌道に乗り、中国が西方世界に目を向け始めた時期にあたり、毎日が新鮮であった。一九八四年頃は、毎晩のように学生宿舎で集會が開かれ、熱気に満ちた討論会の様子がキャンパスを歩いていても漏れ聞こえてくる、そんな時代であった。接してくれる中国の方も頗るオ

ープンであったし、社会が大きく変わるのだという希望に溢れていたように思う。先生の翻訳された『黄河文明への挽歌・河殤と河殤論』（学生社刊）は、IT化が総監視社会を生み出しつつある中国の現状からは考えられない当時の自由な雰囲気伝えてくれている。中国での長期の滞在をつうじて、先生は各地の遺跡を精力的に回り、歴史景観と史料とのあいだを何度も往復されながら歴史を読み解くという、それまでの東洋古代史研究にはない斬新な研究手法を自らのものとされた。そうした手法から文系・理系の枠組を越えて衛星画像やGISを活用した古代史研究へとつながり、文献だけではなくうかがうことのできない多くの新たな知見が開かれていった。先生の古代史研究の取り組みを拝見していると、学習院大学でのシンポジウムのために一九九七年に来日された、中国歴史地理研究の大家史念海先生が何度もおっしゃられた、歴史家は歩くことが何より大切です、との言葉を思い出す。その言葉さながらに大地を踏みしめつつ、その後も、毎年のように中国を訪れ、中国の研究者と交流を重ね、信頼関係を築かれた。先生を研究代表者として、学習院

大学・復旦大学・慶北大学の共同プロジェクト「東アジア海文明の歴史と環境」（二〇〇五～二〇一〇年）が日本学術振興会アジア研究教育拠点事業として採択されたが、先生のこうした幅広い中国・韓国の研究者との交流・信頼関係がなければ到底実現できなかったものである。

東アジア三国の歴史研究者による日本史・東洋史といった枠を越えた実り豊かな成果をもたらしたこの海文明プロジェクトは、先生のもとで学ぶ大学院生諸君に支えられるところ大であった。先生の学問と気さくなお人柄に魅せられ、学習院大学のみならず学外からも東洋古代史に関心を持つ学生が大学院に進学し先生の指導を仰いだ。活気に満ちた先生の大学院のゼミからは、先生に背中を押されつつ、多くの優れた課程博士・論文博士論文が誕生した。学年末に卒論や修論審査を終えたところで中国古代史の博士論文を副査として二本続けて拝読するという光栄に浴したことも懐かしい思い出である。

先生の研究・教育活動を支えているのはなんとと言ってもパワフルな体力ではないだろうか。二〇〇一年七月のことだったと思う。諏訪湖畔の諏訪レイクホテルで東洋古代史・近代史合同の合宿が開かれた時のことだった。朝食をとりホテルのレストランに入ると、鶴間先生が全身汗だくの短パン姿で現れたのである。何でも朝食前に諏訪湖を一周してこられたのだという。諏訪湖一周コースは約一六キロメートル、よく散歩コースにもなっていて、通常のウォーキングだとたっぷり四時間はかかる。朝飯前、ということばそのままに、難なく一周走破をこなす先生のパワーと健脚ぶりに合宿参加者

一同大いに驚かされたものである。確か前日の晩、遅くまでコンパが続いていたにもかかわらず、である。

その後も目白ロードレースへの参加、さらには還暦を過ぎての東京マラソン完走といい、先生のタフなエネルギーにはいつも驚かされ通しである。東京マラソンに参加された年の卒業証書授与式のあと、苦しい時にかげられる言葉ほど勇氣づけられるものはない、と述べられたことがあった。先生が東京マラソンを完走された直後に発せられたものだけに、卒業生・修了生にとっても印象に残るものであったにちがいない。卒業論文や修士論文の作成などで悩んでいた学生諸君もまた、先生のきめ細やかな助言に勇氣づけられ、見事に「完走」したのである。先生のこれからの益々のご健勝と御活躍をお祈りするとともに、これからも引き続き私たちを励ましてくださることを願うしだいである。